

凍霜害の事後対策に関する新しい技術 被害甚茶園のせん枝処理

[研究のねらい]

2010年3月30日に強度の凍霜害を受けた茶園において整せん枝等の処理を行い、その後の茶芽及び茶樹の回復に及ぼす影響を明らかにすることにより、事後対策技術を確立し茶生産の経営安定につなげる。本課題では、被害甚茶園(枯死芽が2~3節程度の被害)における被害直後のせん枝の深さが新芽生育と一番茶収量に及ぼす影響を明らかにする。

[研究の成果]

- せん枝の深さ別に、前年秋整枝面を基準として-1cm、-3cm、無処理の3つの区を設定した。
- 被害後に生育する新芽を、枯死芽の基部から発芽する腋芽、枯死芽の下位節から発芽する側芽、枯死しなかった頂芽に分類し(図1)、開葉数を経時的に調査した結果、枯死しなかった頂芽と腋芽及び下位節の側芽との生育差が極めて大きく、新芽の不揃いの主因となった(図2)。
- 1cm せん枝区では枯死芽が一定割合で除去され収量構成に占める側芽の割合が多くなり収量が多くなった。一方、無処理区では腋芽の生育が劣ったこと、-3cm せん枝区では再生側芽の伸長が遅れたことにより収量が少なくなった(図3,4)。
- 以上のことから、被害甚茶園(枯死芽が2~3節程度の被害)では、枯死芽を除去し直下の側芽の再生を促すために前年秋整枝面から-1cm程度のせん枝を行うのが適当である。



図1 形態別新芽の分類

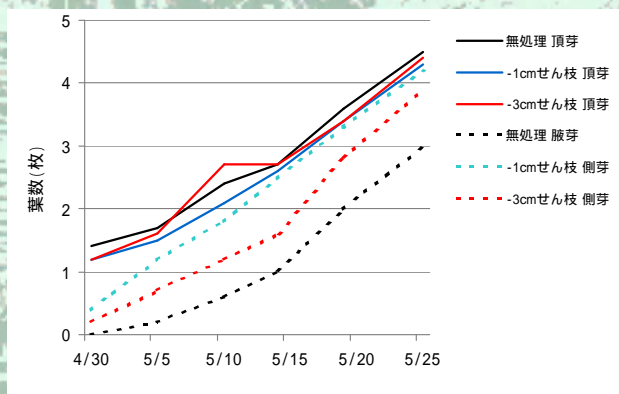


図2 形態別新芽の生育経過

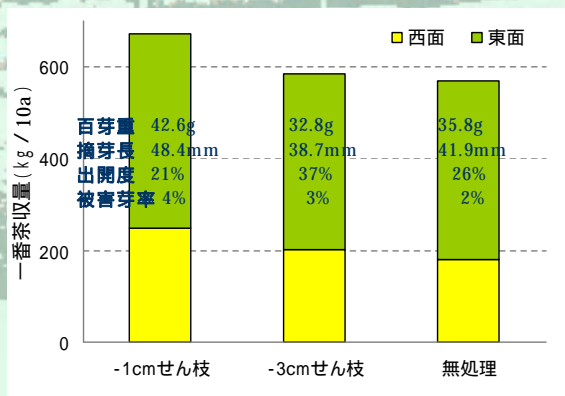


図3 せん枝の深さが一番茶収量へ及ぼす影響

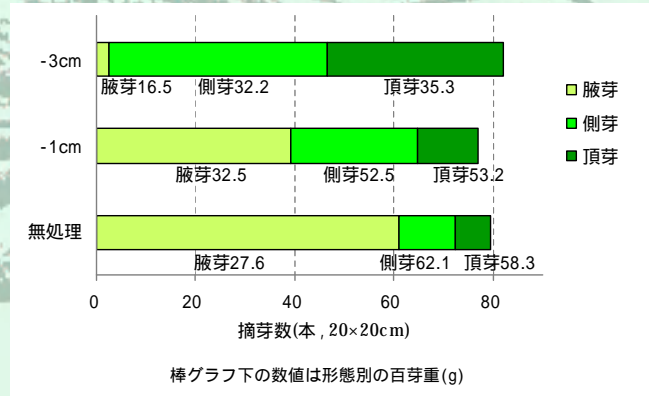


図4 せん枝の深さが形態別摘芽数と百芽重に及ぼす影響